



TITLE:

獨占の本質(二)

AUTHOR(S):

高田, 保馬

---

CITATION:

高田, 保馬. 獨占の本質(二). 經濟論叢 1924, 19(5): 675-693

ISSUE DATE:

1924-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128222>

RIGHT:

# 會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第 卷九十第

行發日一月一十年三十正大

## 論叢

娛樂税の構成……………法學博士 神戸 正雄

フィアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

獨占の本質……………文學博士 高田 保馬

天保時代の西陣……………經濟學博士 本庄榮治郎

## 時論

小麥及小麥粉關稅引上是非……………法學博士 河田 嗣郎

營業稅廢止論を評す……………法學博士 小川郷太郎

## 說苑

リカアドの價值論に就て……………經濟學士 森 耕二郎

## 雜錄

政府の輸出貿易振興策に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

獨逸最近の乳兒死亡率……………經濟學士 岡崎 文規

# 獨占の本質 (二)

高田 保馬

目次

- 六、完全なる競争、自由競争、制限せられたる競争
- 七、獨占價格の決定について
- 八、オッペンハイマアの獨占概念

## 六 自由競争、制限せられたる競争

獨占と區別せられたる多占、新良等の諸地位も亦それぞれに競争の制限即ち其不十分なる事を意味する。私は茲に十分又は自由なる競争と完全なる競争とを區別したい。獨占多占等の種々なる特殊の地位の強みはこの方面に於て存する。これらの地位にあるものは一方に於て、同類に對する強みを有ち、他方に於て賣買の相手に對する強みを有つ。前者の中最も重要なものは企業に於ける排他性とも云ふべきであらう、また後者を名づけて價格の決定に於ける優勝性となす。同類に對する強みと云ふものより説く。一定の企業、又は一定の條件(方法組織等)に於ける企業を營み得る個人的能力を有し、又特殊の事情にして存在せずば當然此意志を遂行し得る資力を有

するもの、これを茲に同類と呼ぶ。一定の企業（以下、一定の條件に於ける一定企業と云ふものをも此中に含ましめる）を此同類が其意志する時いつにても營み得る時にそれは排他性を有せず、然れども、彼が之を營み得ざる姿にある時、それは排他性を有する。勿論茲に同類と云ふものには決して嚴密なる限界なし、併し社會の全成員が或る一定の企業を中心として見る時、此同類と同類ならざるものに別たれ得る事は明であると思ふ。然らば此排他性とは此企業がたゞ單一主體のみに限れる時にのみ認めらるゝかと云ふに然らず、それが數多の主體にもまた許されてなは排他性があり得る。他の同類が求めて得られざる限りそこに排他性ありと見なければならぬ。従ひて超費餘剩のある所にのみ排他性ありと考ふべきに非ず、たゞ此排他性が價格形成の上に特殊の作用を營み得る所には超費餘剩が成立する。此際かの排他性が有効であると云ふ。排他性が有効なる爲には次の條件の何れか充されなければならぬ。生産物の供給なほ需要を充すに足らず、従ひて財のあらゆる單位が超費餘剩を含める價格を有するか、又は現に一定財の供給者にして其條件又は地位（企業の上の條件）を有し得ざるものあるか、これである。前の場合、餘剩は一般的に存立し、後の場合、それは部分的に、云はゞ生産費節約の差益として、部分的にのみ存立する。排他性の有効ならざる場合は經濟學的考察の上に意義乏し、かるが故に以下、單に排他性と云ふ時は有効なる排他性を指す。私はなほ進みて、賣買の相手に對する強みを考へなければな

らぬ。

茲に賣買の相手に對する強みと云ふは所格「價格鬭爭」に於ける强者の地位である、交換の要求の一方的急迫 (einsseitige Dringlichkeit des Austauschbedürfnisses) である。多少の不精確を忍び通俗の言葉を以て云へば、これ需要に對する供給の不足を意味する。これと排他性との關係は決して單純に表裏の關係に立つものとは見難い。排他性の存してなほ此價格決定に於ける優勝性の存せざる場合あり、後者存してそれが前者に伴はざる場合がある。此排他性、優勝性共に存せざる場合、そこに競争が十分に行はれると云ひ、從ひて此場合の競争を十分なる競争又は自由競争と云ふ。此自由競争の名稱は私の勝手に與へたるものに非ず、從來の陳套なる用語に従へるのみ。而して今、かの排他性が同類に對して存在せざるのみならず、社會全成員の何人に對しても存せずとせよ、この條件の上に競争がゆく所まで行はれるとする、その時は勿論價格決定に關するかの優勝性も存しない（この時、所謂平等者の社會がある、所謂社會的分業の上に立つ小さな獨立生産者の交換經濟がある。）かゝる競争を名づけて完全なる競争と云ふ。かゝる事情の下に於て企業が極限的の姿に到達し、普通に企業と稱し難きものとなる事は他の場合に詳論したる通りである。

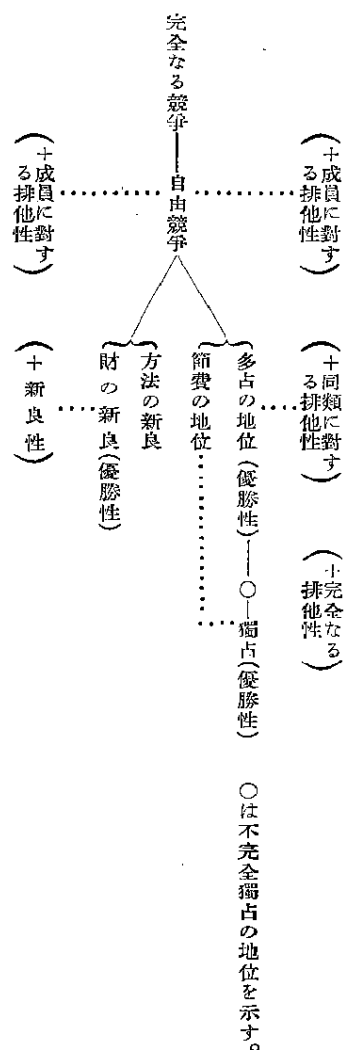
特殊の地位の強みの二方面を明にし、十分なる競争又は自由競争と完全なる競争との區別を明

にしたれば、進みて當面の問題に立ち入るべきであるが、今は豫備時考察を要する事柄がある。

それは企業に於ける新良性にして、前述の新良の地位の本質をなすもの、新良の企業が他の企業に對して有する特徴である。生産物の價格の形成の上には企業の排他性と全然同一の作用を營む。云はゞ獨占又は多占に於ける排他性の類似物である。競争をば中心として之を見れば、競争の十分に行はれうべくして未だそこまで行はれざる性質、即ちその未存性として考へ得る。この未存性と價格決定に於ける優勝性との間には密接なる聯絡があるけれど、二者は必ずしも表裏の地位に立たず。この事は排他性に關して述べたると親密なる類縁を有する。この新良性又は競争の未存性は企業者、供給者の需要者に對する強みに非ずして他の同類に對する強みである。

同類に對する強みの二種即ち排他性と新良性、賣買の相手に對する強みと見らるべき優勝性、此三者は皆それぞれ競争の自由、即ち十分ならざる事を意味す。前の二者は同類相互の間に於ける競争の或る程度に於ける制限にして、最後のものは、價格を自己の望む所に定めしめむとする競争に於ける制限とも見得る(註)。

(註) 競争の特徴を以て、争闘の直接性を缺ぐ點にあり(詳細は拙著社會學概論第三篇第二章參照)となす時、この所謂價格争闘は競争と見がたい。第一は此點より、次には、此優勝性が他の同類に對する強みによりて存否を決定せられるものである點より、私はこれから来る競争の制限に對し、別に重きを置かず、又強く私見を主張しようと思はない。



競争の制限の種々なる場合に關する私見の概要をば前表を以て示す。完全なる競争を制限するに、社會全成員に對する企業の排他性(屢階級的獨占と稱せらるゝもの)を以てすれば自由競争が成立する(自由競争が茲に云ふ節費の地位を含み得となす見方もあるが、この點に今立入り得ない)。自由競争になは一段の制限を加へよ。一方同類に對する排他性を加ふ、それは財の種類の排他性なるか、生産方法の排他性なるかに従ひて多占の地位、節費の地位が成立する。他方、新良性を加ふ、財と方法とに關するそれぞれの新良の地位が成立する。排他性を更に進みて完全なるものとなせば、そこに獨占が成り立つ。賣買に於ける強みは方法に於ける排他性、新良性の加はるとも成立せず。財の種類に關する新良性と排他性についてののみ成立する。此の如く見來れ

ば、極限の場合として一方に完全なる獨占がある、これにありては競争が全然存在せず。他方に自由競争がある、これにありては企業の階級的占有を離れて考ふる限り、競争に何等の制限がない。而して現實は常に此兩極限の間に介在し、競争は常に雑多の制限を受ける。此制限は排他性が新良性かであり、これはそれぞれ競争の或る程度に於ける不能（從ひて不存）及び未存を意味する。同一の企業は此兩種の制限を同時に受ける事も少からずと考へられる。故に完全なる獨占のみは一切の競争を斥けてゐるけれど、其他の特殊なる他位は皆或る程度に於て制限せられたる競争を伴ふ。何等かの特殊の地位即ち強みの存する所獨占を認め、從ひて今日一切の經濟的事象に獨占の普遍的色彩を認むると共に、獨占の中に競争の存立を見むとする意見は、かくて私の採り得ざる所である。

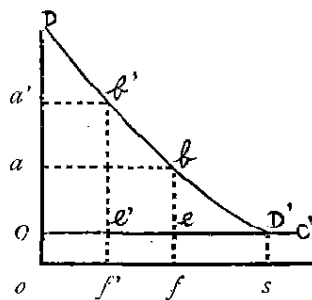
私は今まで、獨占と競争との關係を述べた。轉じて獨占と價格との關係を考察したいと思ふ。

## 七 獨占價格の決定について

獨占價格の問題は別に特殊の考察を要しよう。茲にはこれに關する從來の研究を前提として二の私見を述べるに止める。普通に獨占價格は生産者が最大利潤を得る點に定まり、而してそれは一般に競争價格よりも高き傾向ありとせられてゐる。所謂最大利潤を得せしめる價格とは財の



一單位當りの超費餘剰と賣買せられる單位數との積の極大なる如き價格を云ふに外ならぬ。然れども、私はこれに關して二段の敘述を添加したいと思ふ。第一、獨占價格は生産者をして最高利潤を得せしむる價格である云ふ點に異存はない、然れども獨占價格は何故にたゞ一ならざるべからざるか、何故に複數の價格が存立し得ざるか。獨占者が全然目的合理的に活動する限り、彼は買手の能力に應じて賣買の價格の指令し得べき自由を有する筈である、従ひて其能力の異なる限り、異なる價格に於て之を賣りうべく、又之を賣らむと力むべきである。今上の圖に於てDD'、



を需要曲線  $CC'$  を生産費を示す線なりとすれば、一般の獨占價格論によれば、例へばクルノオ以來マアシャルに至るまで、明確に斷定せられたるが如く、供給  $of$  に於ける利潤を表はす積  $abec$  が他の如何なる場合の利潤を表はす積よりも大なる時、 $bf$  が獨占價格となる。然れども、私は思ふ、彼は何故に、一部分  $of$  丈けをば價格  $b'f$  を以て、次に  $ff$  丈けをば價格  $bf$  を以て又更に  $ff'$  をば  $f'f$  を以て賣り、之によりて利潤  $abec + ab'e'c' + ab''e''c'$  を得むとせざるか。

前述したる温泉の持主を想定せよ。彼は先づ入浴料を二〇と定めて浴客一〇〇人を得、次に一五と定めて三〇〇人を得、次に一〇と定めて六〇〇人を得る事が出来る、此際何の爲に、最初よ

り一〇と定めて浴客千人を得て甘するや。若し然りとせば彼は利益一萬二千五百の中六千五百を棄つるものである。彼は繼時的に買手の能力に應じて價格を定め得るのみならず同時的にも之を定め得る。板園一枚を以て廣大なる浴場を四五に區別し、之に浴料二〇、一五、一〇等と記す時は、入浴と同時に虚榮を買はむとする人々は彼をして同様な利益を得せしめる。此能力に應ずる原則にして極限まで追求せらるゝ所利潤は前圖に於ける *adec* に非ずして *DeD* である、價格は賣買せらるゝ財の單位數だけあり得る。現實に於ては非經濟的なる（經濟の原則の作用以外にもとづく）顧慮と其他の事情が此極限の實現を妨げるとは云へ、純理論上に於ける獨占價格の高さと獨占利潤の大きさは此の如きものと考へたい、少くも私は今、此考をすてゝ通説に従ふべき理由を發見し得ない。

第二、獨占價格が實際に於ては種々なる事情よりして前圖に於ける積 *prod* を極大ならしめる點に定まるとしても、それは競争價格より高きを常とするか。これは次の如くに答ふべきであると思ふ。現在の獨占者が自由競争に與る一人として現在の仕掛を以て生産する時に受取る價格は彼が獨占者として受取る價格よりも大抵小である。然れども、現在の供給額が多數の人々の競争によりて供給せらるゝ時の價格とそれが獨占的に供給せらるゝ時の價格とを比較する時は、組織による節約の法則の作用その他（こゝに詳述せず）の力によりて大抵は後者を小なりと見るべきで

る。特に最も注意すべきは、今日獨占事業なりと云ふものゝ、その排他性は決して必ずしも十分ならず、常に多少の程度づゝ潜在的競争の威嚇の下にある。従ひて此未然の競争は常に所謂獨占者をして仕掛の擴張、之に伴ふ生産費の低下と共に價格を引き下ぐるの已むなきに至らしめて居る。然れども、本來この問題は財の需要の弾力性、生産費に關する報酬の遞減遞増の狀況など複雑なる事情を顧慮し、種々なる定型の場合を想定してはじめて解答せらるべき事である。今はただ獨占價格の一般に競争價格よりも高かるべしと云ふ命題の必ずしも成立せずと云ふ事を述べるに止める。

## 八 オッペンハイマアの獨占概念

以上の所論、粗漏極めて多けれども、略ぼ獨占の性質を明にし得たと信ずる。私はこれに關聯して、獨占の本質に關する異見を考へ、且つ獨占によりて利潤が成立すと云ふ獨占利潤説（特に土方教授の見解）に論及したいと思ふ。

獨占の本質に關する見解をすべての重なる學者に就いて考察せむ事は實益なきのみならず、私の希圖する所でもない。私はかゝる見解の最も代表的なるものにしてオッペンハイマアのそれを注視する、從來の學界にありて、獨占の概念を重視し、其經濟學理論構成の基礎となしたる事、

此の如きは類を見ざる所であるから。

從來の學者の極めて多數は獨占の本質を供給の支配詳言すれば市場に於ける全供給量の單意的又は排他的統制に求めて居る。而して此統制と云ふのには事實に於て供給量の伸縮が意味せしめられてある。然れども、獨占者は一定の價格に於て一定の數量を供給する事はあるが價格を異にするにつれて必ずしも此數量を變化せしめる事はない。従ひて私は獨占の本質を財の供給量の方面に求むべきに非ずして其價格の方面に求むべきであると考へ、之を以て價格の自由なる指令にありとなした。然るにオツペンハイマアの獨占觀は全然これら多くの學者のそれと類を異にする。これによれば獨占は一種の社會的なる勢力的地位である、其地位にあるものをして獨占利益<sup>モノポオリゼーション</sup>を得せしむるものである、又は價格鬭争に於ける優勝の地位である。今其繰返されたる説明の文句から二三の例を抜く。

- (1) Als Monopol bezeichnen wir eine gesellschaftliche Machtposition dann, wenn zwischen ihrem Inhaber und anderen Mitgliedern der Gesellschaft wirtschaftliche Beziehungen bestehen, denen zufolge jener, der Monopolist, einen Monopolverginn erhält.

これによれば、獨占は獨占關係と云ふ經濟的關係を成立せしむる所以の社會的勢力ある地位である。獨占關係とは獨占者(強者)が有利の地位に立たざる者(弱者)に對して立つ一の社會經濟的關係である。此關係にありては、強者の所得が、<sup>カ</sup>る地位にあらずるものゝ所得より一定額だけ高い(彼等が同一の資格の勞働力を以て、同一の時間、同一の強度の勞働をなす

をいふ)。(1)此一定額が獨占利益を意味する。

(2) Ein Monopol ist eine Vorzugsposition im Preiskampf, beruhend darauf, dass die Konkurrenz nicht völlig freispiel spielen kann oder darf.

此定義によれば獨占は競争の完全に自由(これは私の用語を以てすれば完全なる)ならざる所に存する價格争闘上の優勝なる地位である。其考によれば競争が完全に自由なる場合には靜的競争價格が成立する。然れども競争の存せざる所そこに、極度なる「交換の要求の一方的急迫がある、而して、かくして成立する獨占價格の限界を劃するものは買手の能力に外ならぬ。競争の存しても完全に自由ならざる所、なほ或る程度に於て獨占價格が成立し、競争價格の成立が妨げられる。

(3) Ein Monopol ist als Unterklasse der Hauptklasse Recht und Verhältnisse gleichfalls ein Verhältnis zwischen Personen und zwar gleichfalls eine wirtschaftliche Machtposition, die ihren Inhaber das Recht oder die faktische Macht gewährt, von anderen Wirtschaftspersonen uneingeschränkte Leistung zu erlangen.

これによれば獨占は人々の關係又は權利そのものである。(1)に於ては獨占と獨占關係とが區別せられた。詳言すれば經濟的に勢力ある地位に外ならず、他の所謂單純なる權利と異なるところはそれが「物によりて仲介せられる」ことに存する。此際勢力的地位に伴ふ利益(所謂獨占利益)が財に對する財の交換に於て實現せられる。單純なる權利にありては給付が一方的義務的であるに止まる。此「物によりて仲介される」姿は如何と云ふに、此際、勢力ある地位は完全に自由なる競争の除却に存する、これによりて、交換の急要(Dringlichkeit des Austausches)は之を自由なる競争の場合に比するに獨占者の側に小にして其相手の側に大である。かくて獨占者は無償に給付を得る事實上の勢力を得る。(5)

もし此獨占概念に組織的説明を加へむとするならば、其經濟理論の全體、特に價格論を詳述しなければならぬ、而もこの小篇はこれを許さざるが故に、かゝる知識を前提として獨占本質に關す

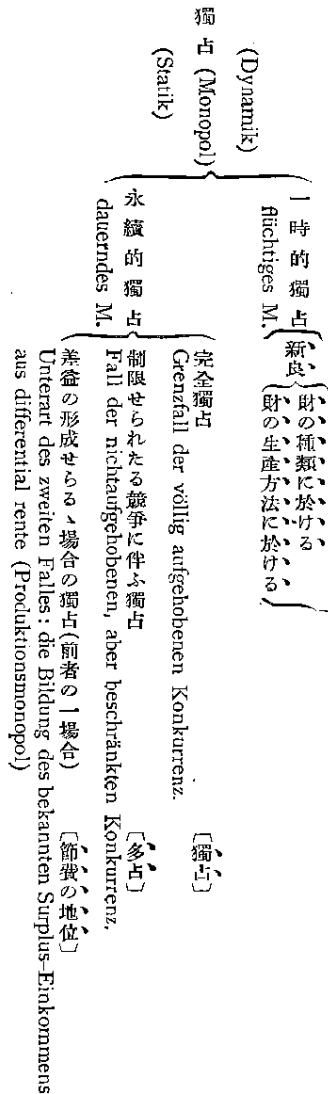
4) Oppenheimer, Theorie d. r. u. p. Oekonomie, S. 235-236.

5) Oppenheimer, Wert u. Kapitalprofit, S. 93-94 ibid., S. 99-100.

る斷章を列舉して、其見解の大體を示すに止める。これによりて知り得る其獨占概念の特徴は略ぼ次の如きものである。(一) 完全に自由なる競争の存せざる所には或る程度に於ける獨占がある。

(二) 獨占と云ふ價格争鬭上の強みある地位は常に獨占利益を伴ふ。此獨占利益は交換に於て得らるるものである。私は思ふ。此獨占概念は明に、一般の獨占概念と相蔽ふものに非ず、それは同一の事象の本質の捉へ方に差異ありと云ふよりも寧ろ、其包括する事象の範圍に著しき差異がある。私の用語を以てすれば、完全なる競争の存する所にのみ獨占は存せず、一般に競争の全く行はれざる所にのみ獨占があると云ふ獨占は、更に廣き意味の獨占一般の極限的な場合を指すに外ならぬ。かくて其見解によれば競争と獨占とは相排除する概念に非ずして相關概念である。完全なる自由なる競争こそ獨占を伴はざれ、其他の所謂制限せられたる競争は常にある程度の獨占を伴ふ。而して、反對の方面より云へば、完全なる獨占に於てすら財の單位相互の間に競争があり、あらゆる種類の不完全なる獨占は皆何等かの制限せられたる競争を伴ふ。かゝる意味に於ける獨占によりて包括せらるゝものは私が前に特殊の地位として列舉したるものゝ殆ど全部に及ぶ。即ちそれは完全なる、又は不完全なる獨占の外、多占、節費の地位、財の種類に於ける新良、生産方法に於ける新良のすべてのものを含む。但しこれは一の制限の下に於て。即ち獨占は物的優秀のみに存し人的優秀に存せずと云ふ制限の下に於て。換言すればたゞ sachliche Qualität

fiktion のみが獨占の中に含まれ persönliche Qualifikation はすべて其中より除外せられる。人そのものと離すべからざる特徴例へば優秀なる音樂家、醫師の技能の如きは獨占の關せざる所である。かくて其所謂獨占は次の如くに表示せられ得る。<sup>(6)</sup>



(前表、點線を附したるものは私の分類の用語をそのまゝ添加したるものである。なほ私は此表を以て、オッペンハイマアの獨占分類の組織的なものであるとは主張しない。たゞ私の今立てる立場から其見解を綜合すれば、かゝる表を作り上げる事も可能であると云ふに止まる。而のみならず、此表はシユムペッタとの土地獨占に關する論争を主眼としたる表を土臺にしたるもので、他の立場から見れば著しく不十分なる點がある。例へば、階級獨占の内容は土地に關するものゝ外、此表に含まれてゐない。)

さて、オッペンハイマアの獨占概念は如何にして成立し得るか。換言すれば、一般の獨占概念

6) Oppenheimer, Wert u. Kapitalprofit, S. 85 ff.;  
ditto, Das Bodenmonopol, Archiv für Sozialw. u. Sozialp. 47 Bd, S. 866 ff.

をすて之を從屬概念として包括する廣義の獨占概念は何故に是認せらるべきや。それは一言にして盡くる。此廣義の獨占と云ふ何等かの特殊なる地位(勢力ある地位)がすべて利潤を伴ひ、而もそれが普通に云ふ獨占利潤と其本質を一にするが故である。從ひて此主張の是非は二つの命題の是非にかゝる。其一、其所謂獨占、即ち何等かの意味に於ける競争の制限は常に必ず利潤(廣義に於ける)即ち超費餘剩を伴ひ而も超費餘剩はすべて此の如くしてのみ成立する。其二、此超費餘剩の成立する機構、即ち道行の組み立ては狹義の獨占利潤のそれと相同じい。蓋し若し此二の命題にして是認せらるべきものであるならば、獨占の概念を今までの如く狹き範圍に閉ぢ込める代りに、廣義の獨占利潤を伴ふすべての場合を包括せしむる事が經濟學の理論構成の上に必要なる事となる。特殊の地位と超費餘剩とが全く相表裏する事柄であるならば、而して前者によりて後者が直接に又一様に説明し得らるべきであるならば、普通の獨占と其他の特殊の地位との間に境界線を引く事は學問上何等の理由もない。又前者によりて後者の成立する道行が獨占によりて獨占利潤の成立するのと性質を一にするならば、獨占概念を推し廣めてあらゆる特殊の地位を包括せしめる外に適當の仕方はない、他の概念の下にこれを包括せしめるのは道理なき事であると思はれる。

然らばこの第二の命題は成立し得るや。私は注意を先づ其所謂正常利潤に集中する、換言すれ



ば階級獨占到集中する。 OPPENハイマア自身も述べたるが如く、第一次的問題は正常利潤に<sup>5)</sup> (Denn nicht der Ueberprofit des Monopolisten ist das primäre Problem, sondern der normale Profit des mit keinem Personalmonopol ausgestatteten Kapitalisten)。其見解に従ふ時、此問題は次の如くにして解決せられる。階級的懸隔の結果として、勞働者と勞働の需要者たる資本家との間に購買獨占が成立する。購買獨占到ありては買手が其價值よりも低き對價を以て買ひ入れ、こゝに獨占利益を得る。資本家が其勞働者に對して有する購買獨占によりて得る此獨占利益のすべてが正常利潤を形成する。それ以上の超過利潤は特定の資本家が他の資本家に對して有する優秀な地位に負ふものに外ならぬ。Man beachte wohl: der Normalprofit ist Klassenmonopolgewinn, der Ueberprofit begünstigter Kapitale ist Personalmonopolgewinn.<sup>8)</sup> 私は今、此正常利潤の形成に關する OPPENハイマアの説明に立ち入りて叙述する餘裕を有しない、私はこれを省略しながら、なほ他の立場からかゝる見方を是非し得ると思ふ。

此點に關する私見の要領を先づ述べる。正常利潤の形成に對して所謂階級獨占が意義なしと云ふのではない、併しながら階級獨占から本質必然的には何等の超費餘剩も生じ來らない、従ひて正常利潤はこれから必然的に生れ出でるのではない。かくて利潤と特殊の地位とが相表裏すと云ふ命題は成立しない。今此主張の説明に移る。購買獨占は價格の上に如何なる作用を有するか。

7) Oppenheimer, Wert u. Kapitalprofit, S. 96.

8) ibid., S. 151.

オッペンハイマアは謂へらく、これにありて獨占者は靜的競争價格よりも低き價格に於て買ひ入れる。今日勞働者は其勤勞 Dienst と云ふ財の供給者として市場に立つ。而も、彼は購買獨占關係の故に、これを競争價格以下に於て賣る、こゝに餘剩價值の成立が看取せられる。これ丈は先づ是認することゝして論を進める。然れども困難は次の點にある。購買獨占によりて買取られたる財は如何なる價格に於て賣られるか。私は思ふ、必ずしも、買値より高き價格に於てゐない。此轉賣せられる財は享樂財(消費財)か生産財かの何れかであらう。第一に消費財の場合を考へる。二の價格の間に差異ある可能は動態以外に於て認められぬ。獨占者から此消費財を買取るものありとすれば、彼は被獨占者(かりにかゝる造語が許されるならば)からも直接に買取り得る、從ひて此値切られたる獨占價格より高き價格に於て之を買ひ入るゝ事はあり得ず、從ひて競争價格に於て之を買入るゝ事はあり得ない。然らば生産財の場合に於ては如何。オッペンハイマア説に關する考察としては場合を二に分つ必要がある。一は單意的購買獨占(普通に云ふ需要の獨占)、二は多意的獨占。後者より吟味する。買手が多數にして、而も、各自皆競争價格以下に生産財を買入れたりとせよ。此生産財によりて生産せられたる財の價格如何。此生産物の生産費は他の費目總計と此生産財の獨占價格(買値)との合計に止まる、生産物が任意に増加し得らるゝ財である限り、此生産費以上に價格は高まり得ない。結局、生産財は買値以上に賣られ得ない。他の

生産者の一部が此生産財を使用し得ざる事情にあるか、生産物の數量が社會の需要に應じ得ざる時は超費餘剰が存在し得ることも、それは自ら別の問題である。かくて私は次の原則を立し得る。購買獨占に於て買入れたる財は買値以上の價格に於て賣らるゝ事能はず。これだけを前提として私は更に考へる。勞働又は勤勞は競争價格以下に於て買はれる、然れども、之を以て生産せられたる財を賣る事により、獨占者たる資本家(之を企業者と區別せずして云ふ)はかの生産財を競争價格其他の買値以上に於て轉賣する事は出来ない(此表明には非理論的な點あるが)。オッペンハイマアは云ふ、資本家は三百馬克の靜的競争價格を有する勤勞を百五十馬克を以て買入れ、之を賣る時には(生産物として)三百馬克を得る、此百五十馬克が正常の利潤を形成すと。然れども百五十馬克を以て買入れたるものは百五十馬克に於て賣らるゝ外に何の道ありや。Der Monopoltribut fließt den Eigentümern der Produktivmittel als ihr Monopolgewinn über ihren Unternehmerlohn zu und bildet den normalen Kapitalprofit と云ふ見解は全く其根據を有せず。

かくて前に述べたる第一の命題が否定せられる。其所謂獨占と超費餘剰とは相表裏するものに非ず、制限せられたる競争にして利潤を伴はざるものがある。而も、かの正常利潤の説明は經濟學中心の問題なりとオッペンハイマア自身は云ふ、獨占概念の擴張の主要なる根據はこれにより

て正常利潤を説明せむとする點に存したりと見なければならぬ、此根據は今や失はれてゐる。次に私は第二の命題を吟味する。一般に超費餘剰の成立する道行は狹義の獨占利潤のそれに同じきか。これを根柢より是非する事は其價值說全體の組み立てに立ち入る事なくしては不可能であると思ふ。然れども、たゞその支持し難き事を論證する爲には必ずしも之を必要としない。オッペンハイマアによりて、超費餘剰一般が狹義の獨占利潤と性質上に同視せらるゝ理由は次の點に存する。獨占(この場合狹義のそれを指す)と競争とが相對立するものに非ず、制限的競争(所謂自由競争もその一場合に過ぎず)の極限これ獨占到外ならぬ。其間に程度の差異ありて質の差別はない。これと平行的に、狹義の獨占價格の構成と其他の超費餘剰の構成との間にはたゞ程度の差異のみが認められる。此境界の抹消は思ふに次の如くにして企てられてゐる。單一の獨占者のみ存する時も、價格の構成に於て決定的なるものはない供給せられたる數量のみ、この數量が價格を決定することについては他の場合と少しも異なる點はない。數多の競争者の對立する場合、於ても、例へば多占の場合に就いて見るに、供給者相互間に暗黙の一致が存在するに至る。これと狹義の場合と價格の機構全然一である。畢竟餘剰は「交換要求の一方的急迫」に基いて存する。さてこれの主張が是認せらるゝならば、少くも私の茲に述べむとする難點は消滅する。然れども、獨占と多占との間既に價格構成上明白なる差異を存する。一方には價格の指令あれども他方

にはこれなし。多占に於て暗黙の一致ありと見る事、一般的事實ではない。獨占利潤が成程一方の急迫に基くとは云へ此基き方に於て特殊なるものがあり、此特殊性は既に多占に於てすら存せず、況んやこれと類縁の遠き他の特殊の地位に於てをや。この事前に詳論したるが如くである。私はかくして第二の命題を否定する外はない。なほオッペンハイマアが獨占概念を「物的優秀」にのみ限定したる事に就いては今詳細なる吟味を加へる事を避ける、私自身は獨占についても多占についても等しく、「人的優秀」を併せて含ましめたいと思ふ。

私は今獨占の本質のみを考察せむとするが故に、獨占の種類又は定型に關しては全然議論を省略する。法的獨占と自然的獨占、個人獨占と階級獨占、購買獨占と販賣獨占、これらについては詳細の批評を後日の機會に譲る。(未完)